

岡山県知事賞

大好きなメイの死から学んだこと

倉敷市立菅生小学校

四年生 渡邊 奏介

「ごめんな、先生は神様じゃないんだ。」

獣医がそう言った次の日、メイは死んだ。

ぼくのおばあちゃんは、ぼくの産まれた少し後に、ヤギを飼いはじめた。名前はメイ。真っ白のヤギで、メイメイ鳴くからメイ。

ぼくは小さいときから、メイと一緒に過ごしていた。だから、メイのことが大好きだ。メイのうんこは、目も鼻も顔も、とにかくそこら中が痛くなるくらいとんでもなく臭い。だから、小屋の掃除はできればしたくない。

そのメイが、冬を迎える少し前、急に立つことができなくなった。獣医は、

「しっかり食べて体力がもどれば、元気になると思う。」と言った。

立つことができなくなったメイは、日に日に弱っていった。起き上がることができなくなって、一人でえさが食べられなくなってしまった。だから、ぼくとおばあちゃんは、寝転んだままのメイの口にえさを運んだ。メイの体力をつけるため、メイの好きな草を見つけたら、その草をぬいて持って帰って、メイに食べさせた。ぼくはメイに、

「おいしい。」

と聞きながら、メイの好きな草を食べさせる。時々、メイは、メイと力なく鳴く。ぼくは、おいしいとメイが言ってくれているように思えた。

だけど、いくら食べさせてもメイのお腹はどんどんへこんでいって、お腹の骨がういてきて、鳴くことすらできなくなっ

た。そして、寒くなるころには、毎日のように獣医が来て、メイに点滴をするようになった。それなのにメイは良くなるどころか、ほとんど動くことができなくなってしまった。

ある日、メイが良くならないことにいらいらしていたぼくは

獣医に、

「先生のくせに何でいつまで経ってもメイを治すことができないのん。おかしかりょう。」

と言ってしまった。おばあちゃんは、

「わざわざ来てくれようる先生にあんたは何ってことを言よんでえ。」

と、ものすごくおこった。それでもぼくは、毎日来てくれたとしても、メイが良くならないのが、どうしても許せなかった。そんなぼくに獣医は、

「ごめんな、先生は神様じゃないんだ。でも、できることはするからね。」

と言った。

獣医が神様じゃないことなんか分かってる。大好きなメイがなかなか良くならないことに対するただの八つ当たりだ。獣医が帰った後のぼくの心の中は、すごくもやもやしていた。なんかくやしいけど、獣医の言うように、ぼくもできることをしようと思った。

メイは、寝たままうんこもおしっこもするから、敷いてあるわらが汚くなっていて臭い。ぼくは、いつもなら言われない限

り絶対しないメイの小屋の掃除をした。

小屋をきれいにした後、ぼくはメイに、

「きれいになったよ。」

と言うと、メイはほとんど動けないはずなのに、頭を少しだけ動かしてうれしそうな顔をしてくれた。その顔を見て、もやもやしていた心が少しだけすっきりした。メイに、

「また明日ね。」

と言うと、メイは、ぼくをまばたきもせずじっと見ていた。その目は、

「掃除をしてくれてありがとう。」

って言ってくれているように見えた。

次の日、メイの好きな草を持ってメイに会いに行くと、メイは冷たくなって、全く動かなかった。

すぐに獣医を呼んだ。獣医はメイをみたあと、ぼくに、

「メイは本当に幸せだったと思うよ。小屋もきれいにしてくれただね。ありがとう。」

と言いながら、ぼくの頭をなでてくれた。その言葉を聞いて、ぼくは涙が出た。メイが冷たくなっているのが分かったしゆん間、ぼくはもう少し早くメイの所に来ていれば、メイが助かつ

ていたかもしれないと、すぐ後かいをしていた。だけど、獣医の「ありがとう」の言葉に、後かいしなくていいよと言われたような気がして、全てが救われた気持ちになった。

ぼくは、動物が好きだから獣医になりたいと思っている。獣医は動物を助ける仕事だと思っていたけど、動物だけじゃなくて、その家族の心も救う仕事なんだと、メイが死んで初めて知った。

メイはもういなくなっちゃったけど、メイのことは忘れな
いし、この気持ちも絶対に忘れない。